
微熱

是安

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微熱

【Nコード】

N6741D

【作者名】

是安

【あらすじ】

僕と彼女の思い出は一緒に帰り道。僕と彼女にとっては近道も寄り道も特別な道にはかわりなかった。忘れかけてた思い出はなかなか思い出せないけど、胸がいっぱいになってしまふ感覚。あなたは約束しなくても一緒に帰ることができますか？

とけない微熱

彼女と出会ったのは僕が七歳の時、小学校一年生の始業式だった。今でも鮮明に覚えている。

彼女は短い髪で男の子みたいな髪型で、目はつぶらで、肌の色は物凄く白かった。

僕は、初めて会った時は、『何か』を直感的に感じた。その『何か』がわかったのは、いつかは覚えていないけど、おそらく一目惚れだった。

彼女とは帰る方向が一緒だったので歩いて30分の距離は、当時の僕にとっては、特別な時を刻んでいたのは間違いない。

彼女との帰り道は、いつも一緒に近道を探してた。

近道を探す僕は早く帰れたかった訳ではなかった。ただ帰り道に彼女と僕だけの特別な道が欲しかったのだ。

しばらく時が過ぎて三年生頃には、僕と彼女の近道は全て試し終わっていた。

それから、寄り道をして帰ることにした。

僕と彼女の帰り道は近道でも寄り道でもどっちでも特別な道な事には変わりなかった。

彼女との日々はとても心地よかった。

意外な事に初めて彼女の家で遊んだのは、四年生の時だった。

それからは約束をしなくても毎日ように彼女の家が僕の家に行った。それから、僕の休日は、公園で彼女のお父さんとキャッチボールをするようになった。彼女は白いワンピースと白いスニーカー姿でいつも決まったブランコで座って微笑んでいた。

初めて彼女とキスをしたのは、六年生の秋の帰り道、僕と彼女は誰もいない公園に寄り道してベンチで二人っきりで座った。

彼女は相変わらぬつぶらな瞳に秋には寒いショートヘアで長い

マフラーを巻いていた。

彼女は熱をだして顔は少し顔が赤かった。

僕が

「帰るか？」と聞いても首を横に振るばかり。

僕はあったかいレモンティーを買ってきて彼女にあげた。

彼女はそれを飲まずにずっと持っている。

その手がとても小さくて可愛かった。

僕はその手をとって初めて手をつないだ。

帰ろうつか？と言いかけた時、彼女の頭が僕の肩にのった。僕は、

頬を彼女の頭にのせた。

彼女の頭は少し熱くて僕の体が彼女の微熱をとかすことができればいいなと思っていた。

しばらくして、彼女が頭を上げて初めてのキスをした。

それから帰り道で、いつもの別れる道でもう一度キスをした。

今でも時々、当時の彼女のとけない微熱を肌を感じる。

すれ違い

彼女との関係が変わったのは中学生になってからだった。

僕と彼女は同じ中学に入学した。僕と彼女は中学で一度も同じクラスになることはなかった。

彼女は、入学してすぐ、僕に彼女の夢の吹奏楽部に入部すること告げた。

僕らの中学の吹奏楽部は全国レベルの実力で毎日のように部活があった。

僕は僕で部活には入らなかった。

それから彼女との話す機会は無くなってしまった。

僕の帰り道はクラスの友達と帰るようになり、土日も友達と馬鹿なことをしていた。

彼女は毎日の部活でとても忙しかった。それから、一年過ぎて中学二年になった。

彼女は僕と同じ身長だったけど、いつの間にか僕のほうが軽く超していた。

僕からみた彼女は小柄で小学校から変わらずつづらな瞳にショートヘアで相変わらずとても忙しそうにしていた。

僕は一年生の時と変わらずに友達と馬鹿をやっていた。そんな僕と彼女はほとんど話さなくなってしまった。

しかし、転機がやってきた。

彼女がうちのクラスに入ってきて僕のクラスの女の子と一緒に僕の前に来た。

彼女の声を聞いただけで、あの頃の思い出で胸がいっぱいになった。あの頃の思い出の音のない白黒映画から音がやとでてきた。そのおかげで、話した内容は少ししか覚えていなかった。

どうやら、僕のクラスの女の子が彼女に頼んで僕を紹介して欲しかったらしい。

彼女は紹介だけして教室を出てしまった。

僕は彼女ともう一度あの頃のように一緒に帰りたいかった。

あの色濃い鉛筆でなぞった思い出と一緒に色を塗りたいかった。でも、彼女の忙しいことは知っていたから、話すだけでもよかった。でも・

何ヶ月が過ぎて女の子が僕に告白をしてきた。

女の子は、彼女と違って髪も長かったし身長も僕と同じだった喋り方も可愛らしかったしテレビのモデルのように細かった。それに、クラス男子にはとてつもなく人気があった。

僕は凄く迷ってからOKをした。彼女のことそう簡単ではないけど、忘れることにした。

彼女のことはそつと遠くから見守るだけにした。それから、女の子の思い出をたくさん作るようにした。

でも、あの頃のように約束しなくても毎日会うということはできなかった。

女の子の思い出は色がはっきりしていた。でも、彼女の思い出のように色濃い鉛筆で彼女に対する思い出で胸がいっぱいになることはなかった。

勇気

彼女とは、あれから全く話していない。

僕は、気持ちの整理ができた。もう、あの頃には戻れないだ。

そして、中学三年生になった。

付き合っていた女の子とは、別れた。

理由は簡単だった。僕が好きで無くなったらしい。

別れたあとは、僕の三年間の残りの期間は、ほとんど受験に向けて勉強していた。

そして、あつという間に秋になった。

その頃の彼女は吹奏楽部を引退した。噂によれば全国大会で名門高校の関係者に声をかけられて推薦で進学するらしい。

僕は地元の高校に進むつもりで必死で勉強に取り組んだ。勉強したおかげで、受験には合格して、高校生になった。

気が付けばもう卒業だった。

彼女とは卒業式に少し進学のことで話すことができた。

もう僕はそれで十分だった。

もっとあの時について聞くことがたくさんあったけど、彼女は、本格的に音楽の道に進むために離れた高校に一人暮らしで行くことを知った。

今さら、何をしても遅かった。

これで僕の中学生生活が終わった。

卒業式が終わり久しぶりに彼女との思い出の特別な近道を通った。思い出は色を塗ったように鮮明に思い出した。秋の夕暮れに狭い裏道や砂利道に短い髪彼女の横顔がカラーではつきり脳裏に浮かんできた。

そして今。僕は思い出に釣られて初めてキスをした公園に向かって歩いている。

公園までの道で初めて手をつないだ感触や彼女のとけない微熱を思い出した。彼女との思い出はカラーで鮮明に脳裏に写っている。

でも、彼女の声が足りなかった。

もう一度彼女の声が聞きたい。
もう一度。

公園のベンチには誰かが座っていた。

僕はその人の隣に座った。そして何気なく隣を見るとショートヘアでつぶらな瞳の彼女だった。

ひどく動揺をした。心臓が速くなっている。僕の胸はいっぱいになって涙が出そうだったのをただ耐えるのに必死だった。

彼女の横顔は夕日で初めてキスした時と同じように赤っぽく見えて可愛かった。

「びっくりした」と可愛らしく彼女が言った。そのあとに偶然だね。と付け加えた。

僕はうん。としか言えなかった。

しばらくの沈黙のあと、僕は勇気を出して今まで聞けなかったことを聞いた。

「ここであつたこと覚えてる？」

しばらくの沈黙のあと彼女は答えた。

「覚えてるよ。」

また、しばらくの沈黙のあと、僕が沈黙を紛らわすために

「吹奏楽続けるの？」と聞いた。

「約束だもん。続けると思う。だけど、そのせいで嫌われちゃったな。」

約束？嫌われた？僕にはわからず

「えっ？」と不意に反応してしまった。

「だって、吹奏楽部に入部してから話さなくなったし。」

「ちがう。僕は逃げていたんだ。僕は君にキスして嫌われたかもしれないと思ってそのことを聞けずにいたんだ。」そう。お互いの勘違いだった。よかったというため息がすべてを吐き出した。でも、約束ってなんの？という疑問になった。

そうだ。初めてキスした時、公園からの帰り道。

僕に彼女は中学生になったら吹奏楽始めたいって言っていた。そのあとに・・・

そうだ。大切なことを忘れていた。

そのとき、僕と彼女の思い出がすべてカラーで彼女の心地よい声が聞こえる。

すべては、僕の勇気が足りなかったんだ。一步の勇気で過去の出来事も変わってくるんだ。そして、今彼女が隣いて、勘違いしていた三年間は今また、ゆっくりと取り戻しつつある。

今、僕と彼女は三年前と同じベンチに座っている。

そして、彼女の頭が僕の肩の上ののって僕の頬が彼女の頭に触れている。

彼女の微熱はとけていた。

勇気（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

実は似たような体験がありまして少しオリジナルをいれて書きました。

最後の約束は恥ずかしいので内緒です。

想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6741d/>

微熱

2011年1月16日02時12分発行